

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	東京都
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	江東区立深川第六中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	2	0	4	14
生徒数	12	25	49	0	86	

研究の概要

1. 研究主題

学力向上へ向けての学習活動の工夫

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全教科(技術・家庭科を除く)、全学年(教科によって異なる)
理由
 生徒の学力向上は本校全体で取り組むべき急務のことがらであり、必修教科だけでなく選択教科も含めた全教科、総合的な学習の時間、ひいては学校生活全体の教育課程の改革をも視野に入れて考えていきたいからである。
 ただし、各教科で取り組む内容については、それぞれの教科で重点目標を決め、特定の学年における生徒の変容を考察することになる予定である。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 「学力向上への試行 - 『教育課程の在り方』『選択教科の在り方』『小中連携の在り方』の検討 -」</p> <p>仮説 生徒たちの学力低下の原因のひとつであり最大の要因は、「学習離れ」であると考え。学ぶことに意義や価値を見出すことができない社会的状況のなかで、生徒たちは学習習慣を身に付けることもないまま、家庭ではほとんど学習しなくなっている。加えて、今年度から各必修教科の指導時数が削減されたことで、前時の授業までで既習のことがらを次時の授業まで保持できず、指導が連続しない状況になっている。このような状況は全国的なものであり、各学校現場だけの対処療法的な対応では改善し切れるものではないが、ただ手をこまねいているわけにもいかない。</p> <p>そこで本校では、各教科指導や総合的な学習の時間の指導における指導方法や指導形態の工夫・改善、教材の開発等と並行して、本年度は、教育課程全体の工夫・改善や地域小学校との連携等の大局的な視点からの対応によって、上記のような状況を改善していきたいと考えた。</p> <p>具体的には、学習が連続するような教育課程を組み、今年度から枠が大幅に増えた選択教科の指導をさらに充実し、地域小学校との指導の連携をとることで、学力を定着させることができると考えた。</p> <p>また、本校は小規模校であり、その利点を生かすような教育活動に取り組むことによって、学習意欲を向上させることができるであろうと考えた。</p>
--------	---

	<p>研究の内容・方法</p> <p>『教育課程の在り方』『選択教科の在り方』『小中連携の在り方』の3つの課題を、3つの分科会に分かれて研修を進める。</p> <p>『教育課程の在り方』では、授業時数を確保し、生徒の学習を継続させる目的で、「45分間7時間授業」を試行し、年間予定に位置づける可能性を探る。</p> <p>『選択教科の在り方』では、昨年度までの研究成果をもとに「個を生かし、主体性を促す選択授業の在り方」を追究し、必修授業との関連についても考察する。</p> <p>『小中連携の在り方』では、各教科や総合的な学習の時間の指導を中心に、生徒の学力が向上するためには、小学校の先生方と何をどのように連携していけばよいのかを考察する。</p> <p>なお、小規模校の特色を生かした教育活動としては、各教科でのきめの細かい指導はもとより、音楽科を中心に「全校合唱」を試みる。</p>
--	---

平成15年度	<p>テーマ 「学力向上へ向けての学習活動の工夫」</p> <p>仮説 必修教科と選択教科との指導の関連、生徒一人ひとりに応じた学習教材の開発、少人数授業と一斉授業等の指導形態の在り方、小学校の指導と連携した指導の在り方等を、各教科が中心になって検討し直し指導を工夫することにより、生徒の興味関心を高め、学習意欲を持続させることができるようになることを考える。</p> <p>さらに、長期間にわたって生徒の変容を追うことにより、生徒の様相をより的確にとらえることができるようになり、学力を向上させることができると考える。</p> <p>研究の内容・方法 各教科で、指導方法や指導形態、指導教材等についての再検討をする。その際、各教科で、「<u> </u>のための教材、及び指導方法の工夫・開発」という研究副主題を設定して、研究を進めることを原則とする。各教科の研究副主題と研究の内容・方法の概略は、次の通りである。</p> <p><u>国語科</u>「長文の読解力を高めるための教材、及び指導方法の工夫・開発」 読解力は、語彙力、文を読み解く文法的能力、文章を読み、要旨をとらえ文脈をたどる能力、音読の能力によって支えられているととらえ、これらの能力の向上を図ることで長文読解力の向上を目指した。具体的には、<u> </u>に関しては漢字学習と朝読書を、<u> </u>に関しては、まず大段落の大意をまとめる学習と形式段落の要旨をまとめる学習とを行い、次にその結果をふまえて全体の構成を考える学習を、<u> </u>に関しては、ルビを振ったテキストによる音読の練習を行った。</p> <p><u>社会科</u>「生徒の興味・関心を高め、基礎学力の定着を図るための教材、及び方法の工夫・開発」 学習指導の工夫・改善の具体策として、<u> </u>総合的な学習の内容を深めるために「パソコン新聞」を作る、ワークシートを作成して授業を展開する、<u> </u>の2点を実践した。</p> <p><u>数学科</u>「証明の意義の理解を深めるための教材、及び指導方法の工夫・開発」 「類推や帰納によって導かれた偽の命題」の収集・開発をし、適宜生徒に示して指導することで、証明のもつ一般性の理解を深めようとした。<u> </u>どのような指導の工夫が証明の意義の理解を深めるのかを、文字式による証明や図形における証明の指導全体を振り返り、授業における生徒の反応や調査問題の解答を分析し考察することを通して</p>
--------	--

	<p>明らかにしようとした。</p> <p><u>理科</u>「直接体験を重視し、創造性を養う指導方法の工夫」 学力向上のために、好奇心をもつための基礎的な知識の獲得、印象に残る直接体験を重視した実物による活動、体験に終わらせない科学的な考察による創造性や発展的学習を進める態度の育成、の3点を授業のなかに取り入れた実践を試みた。また、授業形態としては、少人数のクラスを構成し、実験や観察を極力個別化するようにした。</p> <p><u>音楽科</u>「表現力の向上～個の技能を伸ばすための指導の工夫～」 個の技能を伸ばし、より豊かな音楽表現を目指すために、次のような取り組みを行った。合唱の昼休み練習、江東区中学校合唱教室への参加、個人指導への取り組み、歌詞の内容に目を向けた指導</p> <p><u>美術科</u>「基礎的能力向上のための教材、及び指導方法の工夫・開発」 特に重視する基礎的能力として、「デッサン力」、「発想力」の2点に絞り、その育成を通して総合的な美術の力の向上につなげようとした。</p> <p><u>保体科</u>「技能を伸ばすための指導の工夫」 バレーボール、陸上競技・持久走、ダンス・ソーラン節、健康と生活、の4つの単元について、では部活動的指導を、では自己選択によるクラス別指導を、では集団での表現力を高める指導を、では子供のためのお弁当づくりの指導を、というように指導方法を工夫して技術向上を図るよう試みた。</p> <p><u>英語科</u>「学ぶ姿勢を身につけさせ、基礎的な英語力を定着させるための教材、及び指導方法の工夫・開発」 2年生を研究対象に、家庭学習の必要性を理解させ、達成感をもって学習を持続させることを目標にした。日頃の指導方法の工夫としては、教科書の指導では、ア)ノート作り、イ)音読の指導、ウ)単語テスト、エ)文法プリント、オ)英作文の取り組みを、ALTとのTT授業での指導方法の工夫としては、ア)Quiz Grid、イ)Domino Gameの取り組みを、文化祭での発表のための取り組みを、行った。また、英語検定や都中英研のコミュニケーションテストなどへの受験を働きかけ、自分の客観的な英語力を把握させようとした。年度末には、アンケートによる自己評価を試みる予定である。</p> <p>各教科の研究と併せて、『選択教科の在り方』『小中連携の在り方』の2つの分科会で、それぞれ、昨年度に引き続き「個を生かし、主体性を促す選択教科の在り方」の取り組みをより一層深め、実践的な研究を継続したり、昨年度立案した具体的な方策をもとにした小学校との教科指導の連携等、学校全体の教育課程にもかかわる事項に関して研修したりした。</p>
--	--

平成 16 年 度	テーマ 「学力向上へ向けての学習活動の工夫」 仮説 平成15年度に同じ。 研究の内容・方法 原則として、各教科で平成15年度の研究を継続する。
--------------------	--

(3) 研究推進体制

- ・研究推進委員会*を中心に、全職員で協力して研修を進める。
(* 構成メンバー ; 校長、教頭、教務主任、生活指導主任、各学年主任、研修主任)
- ・平成 14 年度は、『教育課程の在り方』『選択教科の在り方』『小中連携の在り方』の 3 つの課題別の分科会に分かれて研修を進めた。
- ・平成 15 年度は、各教科の研修と、『選択教科の在り方』『小中連携の在り方』の 2 つの課題別の分科会に分かれての全体研修とを併せて進めてきた。

平成 15 年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 各教科の研究の成果

国語科 ; 生徒自身の自己評価によると、 に関しては、漢字が身に付いた、あるいは多少は身に付いたと答えた生徒が全体の 70 ~ 90% に達した。
 に関しては、文章を読む力が以前より付いた、あるいは多少は付いたと答えた生徒が全体の約 75%、文章を読んで読解の問題を答える力が以前より高くなった、あるいは多少は高くなったと答えた生徒が全体の約 80 ~ 85% に達した。 に関しては、1 年間しか実践していないので、まだ成果ははっきりしていない。

社会科 ; に関しては、各学年、文化祭で展示して発表した。また、授業を通して、生徒一人ひとりが互いに「パソコン新聞」に対する意見や考えを述べ合うことは、大変有意義であった。 に関しては、授業内容がワークシートに記載されているため、板書事項をノートに移すことも少なくすみ、教師の話を中心して聞くことが出来るとともに、作業や課題にゆっくり取り組めるため、大変効果があった。その結果、基礎学力の定着を図ることにつながったと考える。

数学科 ; に関しては、中学生にも理解できる「類推や帰納により導かれた偽の命題」が 6 例収集・開発できた。 に関しては、帰納的な説明の方法に対しては「類推や帰納により導かれた偽の命題」を反例として用いる、実験・実測による説明の方法に対しては操作活動を取り入れることで必然的に誤差が生じることを理解させる、等の示唆を得た。

生徒の学習成果としては、小関・国宗他の先行研究の「論証の意義」の理解度をはかる調査問題を実施したところ、すべての項目で同等かよい結果が得られた。

理科 ; 前年度に比べて直接体験の機会は格段に増え、生徒の学習動機の高まりが見られた。特に、学力の低い層においては、わずかではあるが基礎学力の底上げができたと考える。

音楽科 ; に関しては、・「歌うこと」が学校生活の中にとけこみ、音楽的環境が豊かになっている、・発展的な内容に取り組むことができるため、歌唱技術、音楽性が伸びている、・学年を超えた活動ということで、よい刺激を与え合っている、・授業のなかでの音とりに要する時間の縮減に寄与している。 に関しては、・参加者が昨年度 55 名であったのに対して、今年度は 67 名と、生徒数減にもかかわらず増えている、・これまでに参加した生徒はほぼ全員が満足感を得ている、・他校の教員による指導を受けることができるため、新鮮な気持ちで集中して歌うことができる、・普段の授業とは違った角度からの助言を受けることで、「できた」という実感とともに、さらなる関心と意欲が生まれている、・作曲家本人の指導を受けることができる、・日頃、少人数で歌うことの多い本校の生徒にとっては、多人数での響きに包まれる感動が大きい、・「ティアラこうとう」大ホールでの発表の機会が与えられる。 に関しては、・ひとりで声を出すという

緊張感を持たせることで、自分もしっかり歌わなければいけないという意識につながる、・自分の出した声を確認することで、自己の課題にはっきり気付かせることができる、・ひとことずつの助言を与えることで、生徒の自身と意欲が高まった、・男子生徒の変声期の声の変化を理解することに役立つことがわかった、・一人ひとりの声をすべて確認できる。 に関しては、・歌詞に目を向けて、自分なりのイメージをもって表現することが大切であるという意識付けができたこと、・美術科との連携による歌詞のイメージによる写真撮影と文章による解説では、豊かな発想で撮影された写真や自己のイメージを掘り下げた文章が多数あった。

美術科； 「デッサン力」の向上に関しては、年間で3回しか取り組むことができず、成果があがるまでには至っていない。「発想力」の向上に関しては、どの学年も予定していた課題をほぼ実施することができ、自由かつ独創的な発想を引き出すことができた。音楽科と連携した課題も、鑑賞活動として、自分なりのイメージを持って身近な事物や風景を観察するという貴重な経験につながった。なお、小学校と連携して、本校では地域小学校の児童の作品を、小学校では本校生徒の作品を展示する「作品展」を行った。

保体科； 4つの単元それぞれで技術の向上が見られたが、特に の単元において顕著であった。

英語科； それぞれの実践で生徒たちは着実に力をつけてきているが、客観的な数値で評価できるものとしては、英語検定で2年生25名のうち20名(80%)が5級以上に合格していること、都中英研のコミュニケーションテストの平均点(合計)が都の平均点よりも2点近く高いこと等があげられる。

(2) 分科会の成果

選択授業の在り方

小規模校であるため1講座の生徒数が少ないので、各教科で、授業中、一人ひとりの生徒の様相をとらえながら、主体的に活動ができるような選択教科の実践を試みた。来年度以降、生徒数が極端に少ない学年の選択教科をどのように開設するかという課題については、現在も検討中である。

小中連携の在り方

全教科、及び総合的な学習の時間での連携を計画し、地域小学校へも働きかけをしたが、残念ながら諸事情により、組織的な実践には至っていない。ただし、図画工作科と美術科のように、一部では連携を試みている教科もある。

2. 今後の課題

(1) 各教科の今後の課題

国語科； に関しては、要旨をまとめる力と国語力との関係について、実践を通して追究する。また、生徒が要旨をまとめた後の確認を、どのような方法であるかについても検討する。 についても、来年度継続して追及する。

社会科； ワークシートの記載内容の精選、基礎的な内容と発展的な内容のつながり、作業学習や課題解決学習の取り扱いなどを検討する。さらに、教育的機器の有効活用を図り、生徒一人ひとりの興味・関心を高める工夫をする。

数学科； 「類推や帰納によって導かれた偽の命題」を、さらに収集・開発するとともに、これらを用いた指導が証明のもつ一般性の理解に、直接どの程度役立っているのかを知るための検証方法を検討する。さらに、今年度の研究対象である2年生が来年度文字式による証明の学習などを通して

どのような変容を示すか、縦断的に考察する。

理科； 発表する力を伸ばし、互いの学習成果を共有できるようにして、学習に深まりを求める。具体的には、今年度の3学期には3年生の環境学習で、来年度は2年生の気象の単元、3年生の生物分野で実践する。また、総合的な学習の時間で習得している発表技能を教科学習にも生かしていく。

音楽科； 歌詞の読み込み、詩人の思い、作詞者の意図と作曲者の意図、歌詞の表現と音楽の表現、個の表現と合唱(集団)としての表現、指揮者の解釈、聴く人に伝えるための技術的向上(響き・呼吸・音程・発音等)の4点を来年度の課題とする。

美術科； 「デッサン力」の向上に関して、年間指導計画を見直し、指導時数を確保する工夫をする。

保健科； 4つの単元の目標を達成するために指導時数をかけすぎ、他の単元の指導時数が不足しないように、指導時数を確保する工夫をする。生徒たちが自ら進んで学習できる教材の開発や指導法についても追究する。

英語科； 「読む力」の向上対策となる多読、自己表現力を上げ、英語学習に自信をもたせるようにするための「紹介文」作り、関係代名詞を定着させ、英語学習に対する興味を失わせないようにするための詩の朗読や暗唱、1、2年次の文法復習の徹底指導、スピーキングテストの実施、等を考えている。

(2) 分科会の課題

選択授業の在り方

来年度以降、生徒数が極端に少ない学年の選択教科を、どのように開設するかについての検討を早急に行う。

小中連携の在り方

現時点での組織的な連携は不可能であると考え。一部の教科の連携を続けられるものであれば続け、将来、全体的な連携につなげていきたい。

学力把握のための学校としての取組

- ・学力把握のための評価は、各教科でそれぞれ計画的に行っているため、今年度は、特に学校全体として調査等は行わなかった。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・公開研究会の実施(平成15年9月26日、本校会議室、区内小中学校及び地域の人々、研究の中間報告及び講演会)
- ・平成16年2月16日、本校会議室、区内小中学校及び地域の人々、研究の報告及び講演会(予定)
- ・公開研究会のパンフレットを作成し、区内小中学校及び地域の人々に配布し、参加を促した。
- ・フロンティアティーチャーとしては、本校を訪問して下さった他校の先生に、本校の研究の取り組みを説明した。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 14年度からの継続校
- 【学校規模】 4～6学級
- 【指導体制】 少人数指導、TTによる指導、一斉指導
- 【研究教科】 国語、社会、数学、理科、外国語、音楽、美術、保健体育（総合的な学習）
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有